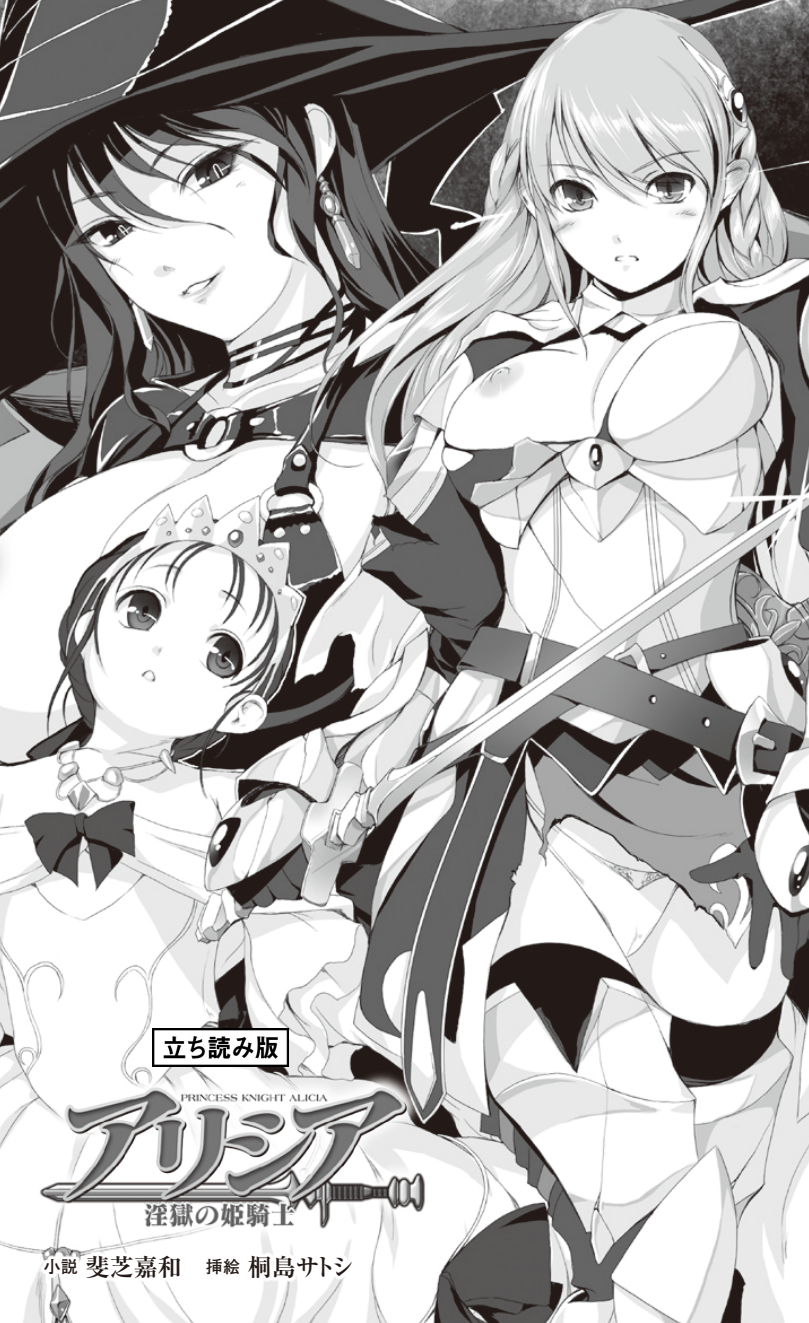
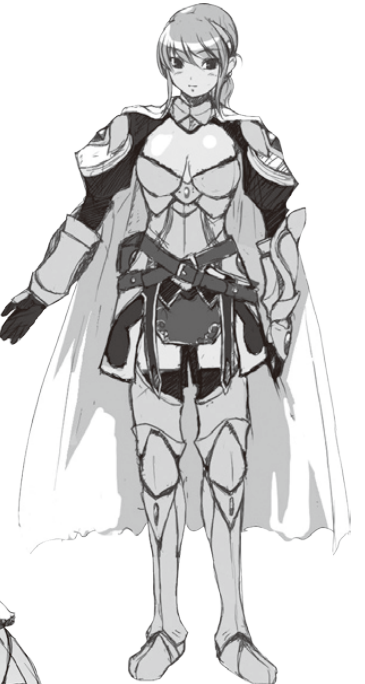

立ち読み版
PRINCESS KNIGHT ALICIA
アリシア
淫獄の姫騎士
小説 斐芝嘉和
挿絵 桐島サトシ

第一章　女騎士、馳せる　006
第二章　魔女の罠　019
第三章　淫虐の地下牢　045
第四章　幼姫の贖罪　089
第五章　堕ちゆく日々　135
第六章　姦落　190
終　章　251

登場人物紹介

Characters



アリシア・リデル

リデル公爵の娘で、ペルセフォフ騎士団を率い魔王軍と戦う。剣の腕に長けており、歴戦の兵士たちからも信頼の厚い近衛騎士団長。

イミス・セフォフ

ペルセフォフ王国の第三王女。年齢の割に世間知らずだが、王族として肝の座ったお嬢様。アリシアに対して強い信頼を抱いている。

ペルセフォフ王

ペルセフォフを治める国王。ペルセフォフ騎士団をアリシアに任せ、魔王軍の侵略に対抗している。

ラーマ

王に雇われた黒髪の妖艶な魔女。年齢不詳。魔物たちを使役して、騎士団とともに王都を守るため魔王軍と戦うが……。

棒状に固化したスライムはほぼ透明で、浴びた月明かりを屈折させ、女騎士の排泄孔を奥の奥まで照らしていた。紅く潤んだ粘膜のいやらしい姿が、目を血走らせている王にマジマジと観察される。

「ほう、ほう……こ、この穴は、奥はこうなっておったのか……」

「っ⁉　う、うぅぅ……ッ！」

穢らわしい肉穴を凝視され、あまりの羞恥に耳の先まで真っ赤になるアリシア。

剣を振るえば魔物と互角、腕自慢の荒くれ者ですら感服させてしまうほど手練れの騎士だが、同時にうら若き乙女でもあり、誇り高き姫でもあった。覗き込んでいるのが敬愛すべき王であっても、あると思うことすら恥ずかしい排泄孔をこんなにもしっかりと見つめられては――。

あまりの恥辱に全身の血が沸騰して逆巻く。理性がひび割れ、頭が煮えてしまいそうだ。

そのうえ――。

「……うっ⁉　あ……うぅっ⁉」

片方の尻房に魔女の冷たい手が置かれ、尻穴に潜り込んでいる太い異物がグリッグリッとこじられた。振動する瘤々にいままでと異なる場所を責めまくられ、突き揺すられて、男を知らぬ膣穴に新たな肉悦が間断なく湧く。

「ごらんの通り、敵の呪物はアリシア様の不浄の穴にしっかり喰い込んでおります。これのせいで――」

尻穴から生えた淫棒に触れていた魔女の手が、下に滑って女騎士の秘裂に触れた。
「ふぁっ⁉　あ……くぅ……ッ！」
掻き割られた肉畝に甘やかな痺れが爆発、四つん這いになったアリシアが地面を掻きむしって仔犬のように鳴く。蜜まみれの粘膜花弁をぬちゅ、くちゅ、と爪弾かれれば、
（あ……く、くぅ……ッ⁉　な、なぜだ⁉　憎らしい魔女に弄られているというのに……なぜ、こんな……し、痺れる……と、蕩け、るぅ……！）
頭の芯まで真っ白になりそうな心地よさが、股間に溢れ返った。腰が勝手にくねり、息が乱れて頬が弛んで、抗う気持ちが押し流されそうになる。
「ごらんください、陛下。アリシア様の女陰が、こんなにも淫らな蜜を……」
凛々しい外見とはうらはらに、穢れを知らぬ乙女のように瑞々しい女騎士の秘裂から、魔女の白い指が離れた。王の眼前に持ち上げ、指と指を摺り合わせてからゆっくりと開き――ぬちゃぁ。
いやらしく光る粘液の糸を見せつける。
「ぬっ⁉　な、なんということだ……滴るほどに、べちょべちょではないか！」
驚き呆れて叫ぶ王、遠巻きにしながらもゴクッと生唾を呑み込む近衛兵たち。
「うへへ、そんなに濡らしていたんじゃ、俺のチンポにむしゃぶりつくのも無理はねぇ」
「魔王って奴は、ずいぶん非道ぇことするなあ」
オークたちの得意げな声が、アリシアのひび割れたプライドをさらに責め立てる。

（く、くそぉ……ッ！　身体さえ、自由なら……！）
本当に、もっと早く、いかがわしい魔女を斬っておくべきだった――歯噛みしても遅い。
悔しげに呻くアリシアの、月明かりに浮き上がった桃の実のような美尻を、薄く笑ったラーマの手が愛でるように撫でる。
まるでお気に入りのペットを弄っているような、毛並みの美しさや滑らかな感触にうっとりしているような――魔女の淫靡な仕草に、王や兵たちは生唾を呑み込む。
「まだ断言できませんが、おそらくいやらしい仕掛けはほかにもたくさんあるはずです。それらを取り除けば、アリシア様は元通りになられるでしょうが……」
「そなたの力を使っても難しいか？　しかし、アリシアを失うわけにはいかん！　兵も民も、朕よりアリシアを慕っておるからな」
魔女の術に搦め捕られて思考力を鈍らせていても、それくらいは分かるらしい。実際、アリシアが王を敬慕する姿勢を崩さないから王も辛うじて尊敬されているのだ。いまここで女騎士を失えば、魔王の襲来を待つこともなく、ペルセフォフ王国は内側から瓦解してしまうだろう。
「なんとしてでも救え！　少なくとも、この気味の悪い呪物は取り除け！」
「畏まりました。では、地下牢をお貸しください」
こうして――ラーマの策は第二段階へ移行した。

第三章　淫虐の地下牢

王城、地下牢――冷たく黴臭い石畳の広間。

中央にはラーマが魔法で作り出した即席の分娩台が据えられ、そこに頬を赤らめた女騎士が仰向けに縛りつけられていた。白銀の鎧は身につけたままだが――大きく左右に開かれた太腿の付け根、肝心の場所が露わになっているのだから意味がない。

（なんという恥辱……誇り高きペルセフォフの騎士が、このような辱めを……！）

解剖台に磔にされたカエルのように、不様で滑稽な姿。剣を振るって戦場を駆ける女騎士の清々しい凛々しさとは、まったく正反対だ。

「さあ、言われた通りに縛りつけたぞ。どうすればアリシアを救えるのじゃ？」

「しっかりしてください、陛下！　この術は、そこの魔女が仕掛けたモノ……本当の敵は、陛下のお側にいるラーマなのです！」

羞恥に乱れる心を叱咤し、淫悦に縛れる舌を懸命に繰って叫んでも、

「これも魔王軍の術です。陛下の御心を乱し、私たちを仲違いさせようという――」

「うむ、分かっておる。アリシアを救おうとしているそなたを、朕は信頼しておるぞ」

したたかな魔女に利用され、ますます泥沼にはまってしまう。

というより――。

（へ、陛下の、目が……いや、陛下だけではない。兵たちの目も……）
己の股間に降り注ぐ男たちの視線に気づいて、アリシアは耳の先まで真っ赤になった。
美しく引き締まった太腿がハの字に開いたその付け根、大きな穴を開けられた漆黒の布地から、紅く熟れた瑞々しい秘裂があられもなくはみ出しているのだ。尻穴には透明な淫棒が刺さったまま――いくつもの柱に吊るされたランタンの明かりを受けて、しっとり汗ばむ柔肌が眩いほどに輝いている。
こうなればもう、男勝りな女騎士も麗しい乙女に過ぎない。しかも、穢らわしい呪物に尻穴を犯され、秘裂をジュクジュクに濡らして、分娩台に縛りつけられている――。
高い戦闘力に裏打ちされた威厳は霧散し、美しく可憐で非力な牝として、すぐ目の前に存在している。男たちの獣欲は否応なく掻き立てられ、まともな思考力を失ってしまい、少々の疑念など敢えて無視して魔女の甘言を鵜呑みにする状態に。
「そ、それで……これからどうするのじゃ？」
「お待ちください、まずは検査を――そこの人たちもこちらへ来て、アリシア様の秘処をごらんになってください」
「え？　い、いや、我々は……」
高まる欲望を危ういところで押し止め、尊敬する女騎士の気持ちを慮って拒む近衛兵たちだが――モジモジそわそわ落ち着かない。本当は見たくて見たくて仕方ないのだろう。
だから――。

「魔術は視線に弱いモノ。ひとりの目だけであれば簡単に偽れますが、多くの者が見ていれば簡単には誤魔化せませんでしょう？」
「う……た、確かに……」
「アリシア様をお救いするために必要なことなら、し、仕方ない……な……」
魔女の言葉を渡りに船として、分娩台に縛られているアリシアの傍へ――その、大きく左右に開かれた伸びやかな脚の間へ、いそいそと寄る。
「や、やめろっ！　寄るな……見るなッ！」
「お許しください、姫様」
「直属の部下ではありませんが、我らもアリシア様をお慕いしております」
「貴女様にかけられたいやらしい術を解くためなのですから、しばし御辛抱を……」
口々に言った兵たちが、王と肩を並べて女騎士の股間を覗き込む。
その、血走った目の前で――くぱぁ。
「あ、あ……くぅうっ！」
肉畝にツッと添えられたラーマの細指によって、秘裂が大きく割り開かれた。
弾けるように飛び出して艶やかに咲きこぼれる、赤々と色づいた粘膜花弁。透明感のある肉華の芯、甘酸っぱく香る淫らな潤みの底には小さな小さな処女膣穴が喘ぐようにヒクついて、コポ、コポ、と新たな愛液を噴きこぼしている。弾けんばかりに勃起したクリトリスには小さな牙のリングが喰い込んだままだが、王たちの目には映らない。なんの企み

か、ラーマが魔法で隠しているのだ。
「なんと淫らな……まさか、あのアリシアの秘処が、こんなにもいやらしいとは……」
「ッ⁉　い……言わないでください、陛下ッ！」
「おっ？　こ、これは済まぬ……」
慌てて謝る王を、魔女が手を上げて止めた。
「いえ、もっと言ってください。アリシア様が羞じらう分だけ、敵の術は弱くなります」
「う、嘘だッ！」
「嘘ではございませぬ、アリシア様。魔法については私のほうが詳しいのです、同じ女としてお気持ちはお察ししますが、どうか御辛抱ください」
「うむ、確かにそうじゃ。餅は餅屋と言うしな。よいかアリシア、我慢せよ。すべてはお前を助けるためなのじゃからな」
「へ、陛下……ふぁっ⁉　ぁあっ！」
王を諌めようとした女騎士が、甘く悩ましい声で鳴いて鋭く反り返った。紅く熟れて蜜を滲ませた感じやすいビラビラの縁を、魔女の細指にツツ、ツツ、と撫でられたのだ。
「さあみなさん、早く御感想を。みなさまがグズグズされていればいるほど、アリシア様は身を焦がす淫欲に苛まれ——最悪の場合、元に戻れなくなってしまいますよ」
「それは困る！　お前たち、早く言え！」
「は……はいっ！」

王に急かされた近衛兵たちが、頬を赤らめて生唾を呑み込んだ。知らず知らず首を伸ばし、鼻息が吹きかかるほどの至近距離からアリシアの秘裂を覗き込んで――。

「も、燃えているように、紅い……しかも、透き通るような紅だ……お、俺……こんなにも綺麗なオマンコは、初めて見ました！」

「さすが、アリシア様です！　お顔だけでなく、こんな場所まで美しいとは……！」

興奮した口調で口々に叫ぶ。

褒めているのだろうが、言われた乙女としてはただただ恥ずかしいだけだ。

そのうえ――。

「うへへ……それじゃあダメですよ、旦那方」

「ラーマ様は『恥ずかしがらせろ』と言ったんだから、褒めちゃダメですぜ」

遠巻きにしているオークたちが、近衛兵たちの上品な言葉遣いを咎めた。

「ちっくら失礼して……うは、こりゃいやらしい！　マン汁が溢れ出してやがる！」

「場末の売女小屋でも、ここまで濡らす牝はそうそういねぇな！　よっぽど俺たちのチンポを咥えてぇらしい……ぎゃっ!?」

身動きできないアリシアの代わりに近衛兵が殴りつけ、得意顔で言葉責めしていたオークを壁際まで吹き飛ばした。

「お許しください、あれらは加減を知らぬ下衆ですので……しかし、分かってください。アリシア様を恥ずかしがらせて敵の術を弱らせるのが目的なのですから……」

「分かっている！　俺たちがするから、穢らわしい魔物をアリシア様に近づけるな！」
薄笑いを浮かべて取りなす魔女を叱りつけ、兵たちが再び女騎士の股間を覗き込んだ。
「ええっと……な、なんといういかがわしさだ。恥ずかしい汁が外まで溢れ出して、い、糸を引いている。まさか、鞍を跨いでいるときもこんな風に濡らしておいでなのか……」
オークの言葉を真似てさらに責めようとするが、やはり、敬愛する女騎士に遠慮してどうしても遠回しな表現になってしまうようだ。それでも、いままで尊敬しかされてこなかった女騎士には十二分な屈辱だったのだが――。
「はてさて、困りましたねぇ……言葉責めだけで術を解ければよかったのですが、みなさまがそのように手加減をされるのでは、ほかの方法を考えなければなりません」
苦笑した魔女がツッと指を伸ばし、アリシアの勃起淫核に軽く触れた。
「あっ⁉　くぅ……さ、触る、なぁあっ！」
触るだけでなく――赤々と輝く表面を磨くように、きゅっきゅとしごかれる。
「うぅ、く……うぅうっ！」
稲光のような快感に打ち抜かれ、分娩台が軋むほど激しく身悶えする女騎士。
（な、なんだ、これは……どうして、こ、こんなに……か、身体が……勝手、にぃっ⁉）
王国の槍となり盾となるべく一心不乱に鍛錬してきたアリシアは、自慰の経験すらほとんどなかった。「そこに触れれば気持ちよくなる」と知識として知っていても、いや知識として知っているからこそ、敢えて避けてきたいやらしい行為だ。

両手は別の男根をしごいているから、支えられていない淫棒は姫の舌に押されるまま、右へ揺れ、左へ跳ねた。唾液に濡れた裏筋が姫の柔らかく幼気な頬に転がり、瞼や鼻筋に真っ赤な亀頭がぶつかって、生臭い粘液をぬちゃ、ねちょと塗り広げていく。

「や、やめなさい……姫ッ！　そんな穢らわしいこと、貴女がしては……あっ⁉」

大柄な男たちに左右から挟み込まれた女騎士が、尻を撫でられ乳房を揉まれ、妖しく身を捩りながら艶めかしい声をこぼした。

「ンぷッ⁉　ぷは……や、やめて、アリシア様に手を出さないでッ！」

「だったら休むな。姫さんが俺たちのチンポをしゃぶって、十二分に慰めてくれるんなら、あちらの騎士様には手を出さねぇよ」

「ほ、本当ですね？　約束ですよ⁉」

「いけません、姫……こんな連中は、や、約束など……くっ⁉　ぅっ⁉」

乳首を抓られ、跳ねるように反り返るアリシア。

（ああ、アリシア様……ッ！）

女騎士を助けたい一心のイミス姫は、嫌悪感を必死にこらえ、可憐な口を大きく開いた。

これしかない――非力な自分がアリシアのためにできることなど、これ以外にないのだ――と思い詰め、己の唾液に濡れてヌラヌラと輝く真っ赤な亀頭を口いっぱいに咥え込む。

途端――。

「……ッ！」

舌に乗る熱い重み。
狭い口腔に充ち満ちる、ねっとりとした甘辛さと咽ぶような青臭さ。
予想以上の気持ち悪さに、細い背が反り返って硬直した。いくらアリシアのためとはいえ、こんな、こんな、こんな——溢れる嫌悪に息が詰まり、意識が遠退きかける。
しかし、猛る牡たちは失神すら許さない。
「くぅう！　これが王族の口か、たまんねぇなっ！」
下品に笑った男が姫の頭を両手で挟み込むように掴み、そのままグイッと腰を進めた。
「ンぉっ⁉　ン、ンぇお……ッ！」
太く硬く、熱く重い肉棒が、舌を押し潰し咽喉蓋を押し退けて傍若無人に突き進む。
（い、息が……！）
生臭い淫棒に喉を塞がれ、呼吸できなくなってしまった。吐き気も込み上げ、細い肩が震え始める。
「おい、どうだ？　高貴なお口は？」
「きつくて狭くて、温かい涎でグチョグチョで……思ったよりイイぞ」
低い声で唸った男は姫の頭を両手でガッチリ固定したまま、自ら腰を激しく振り始めた。
「ンぉっ⁉　ンぷ、ンン……ンぅう……ッ！」
息苦しさに呻くイミス姫の小さな喉仏が、内側から圧され、コクン、コクン、と動く。
痛い、苦しい、気持ち悪い——耐えがたい恥辱が繰り返されて、姫の心が突き崩される。

「おお、狭い喉だ。こりゃあいい！」
口と喉の繋ぎ目にある粘膜の瘤にもっとも敏感なカリ首を擦りつけるようにして、頬を赤らめた男が嬉しそうに吼えた。
姫の口腔を埋め尽くした淫棒が小刻みに震え、太さと硬さ、熱を一気に増して――。
「むぷっ!?　ン、ンぅ……ッ!?」
喉奥に突然、熱い粘液が迸った。
（な……なに？　これ、もしかして……お、男の人がペニスから出す……汚いモノ!?）
爆発的に膨れ上がる青臭さ、食道粘膜に粘ついて胃の腑へと伝い落ちていく、ねっとりとした熱感。
と同時に――びゅくっ！
どぴゅっ！　どぴゅぴゅっ！
頭の左右で姫の手にしごかれていた男根も一斉に果て、滑らかな額や柔らかな頬に濃厚な白濁液を浴びせかけた。
「ひ……ひぃいっ!?」
柔肌に粘着する、熱い重み。
鼻腔にねっとり絡みつく、草いきれのような精臭。
あまりの気持ち悪さに、姫のプライドがひび割れる。いけない、ダメだ、アリシア様を守らなければ――と、わずかに残った理性が叫んでいるのに、

「い、いや……いやいや、イヤイヤぁぁぁあっ！」
喉奥までねじ込まれていた男根を吐き出し、幼子のように泣き叫んでしまう。
「わがまま言うな、姫さん。まだ一本しか咥えてねぇじゃねぇか」
「上のお口が嫌なら、下のお口にしてもらおう」
「ひっ⁉　あ、ああダメ……やだ、た、助けて、アリシア様ぁあっ！」
逃れようとして必死にもがく細い手足が、男たちの手に掴まれ、荒々しく捻られた。ドレスを破られ、藁屑の散らばる土間に仰向けに押し倒されて――膝裏を掬われた両脚が、大きく左右に開かれる。
秘部を守る薄い布地にうっすらと浮き上がっているのは、柔らかく瑞々しい、幼気な肉畝の形。覗き込む牡たちの目が血走り、太い鼻息がさらにさらに荒くなる。
「け、ケダモノ……獣ぉっ！」
「さすが王族、罵り方も洒落てるな」
「はてさて、お偉い王族様のオマンコは、庶民とどれくらい違うのか……」
「あ……あ、あああっ！」
股布が武骨な指に掴まれ、力任せに毟り取られた。露わにされた高貴なる秘処は、円(つぶ)らな瞳が泣き濡れたあどけない顔立ちよりさらに数段幼気だ。
肉畝はまだ薄く、肌理細かな柔肌が乳白色に輝いている。割れ目の縁にある莢だけは艶めかしく紅いが、頼りないほど細い。

「ほう、ずいぶんと綺麗なオマンコだな」
「しっとり白くほんのり紅く……まるで桜の花びらだ。これぞ王族っていう感じだな」
闇の彼方から男の声が聞こえ――姫は自分が瞼を閉じていることに、ようやく気づいた。
怖い――だが目は開けられない。
見られている、見つめられている。こんなにたくさんの、獣じみた男たちに――本能的な恐怖と乙女の羞恥が最高潮に達し、身じろぎひとつできない。
「喰ってるモノが違うのか、肌の色艶が違うな」
「あ、あ……い、やぁっ！」
うっすらと盛り上がったあどけない肉畝を、硬い指先に撫でられた。凶暴そうな顔とはうらはらの、優しいほどに軽いタッチ。
だからなのか――触れられた場所に嫌悪ではなくもどかしさが湧く。
（うぅっ!?　ど、どうして……）
もっとしっかり撫でて欲しいと思いかけた自分に気づき、耳の先まで紅くなる幼気な姫。
「やめろ、下郎……姫様のお身体に、き、汚い手で、触る、な……！」
人垣を作った男たちの背後から、アリシアの掠れた声が聞こえてきた。
恥辱に強張った顔をハッと上げ、助けを求めようとしたイミス姫は――寸前、開きかけた口を慌てて閉じる。秘裂をまさぐる指先が小さな小さな淫核に触れ、小刻みに振動して、稲光のような快感を産みつけてきたのだ。

「く、あ……う、うぅぅ……ッ！」
鋭い恍惚感が次々と閃き、薄い背筋に悦びの波が走り抜けて、男たちに抑えつけられた華奢な身体が羞じらう姫を無視して勝手にくねる。
（いや、やだ……恥ずかしい！）
頭の中が真っ白になるほど羞じらっているのに、幼気な頬は快感に蕩け、薔薇の花びらのような唇がわななきながら吐息をこぼす。
「どうだ姫さん、気持ちイイだろう？」
「うぅ、く……ンぅぅ……あっ⁉　あ、あぁッ！」
股間に産みつけられる快美感を必死にこらえていると、ドレスの胸に手が被せられ、申しわけ程度の膨らみが乱暴に揉み込まれた。
途端、胸先に弾ける快感。
クリトリスの悦びが飛び火したのか、小さく可憐な乳首がいつの間にか硬く勃起し、ドレスの裏地に擦れて甘やかに痺れてしまった。
「や、やめ……いや、許してぇえっ！」
叫ぶ言葉がみっつの快感極点に発した心地よい波に煽られ、はしたないほど裏返る。
幼気な姫の淫らな変化に気づいた男たちは、獣の笑みを深めた。虚しくくねる姫の細い腕や瑞々しい太腿を、ねっとりとした手つきで撫で回す。
「いい手触りだ、さすが王族」

「ちっこくて細くて軽くて、すべすべしてしっとりして、柔らかくて温かくて、いい匂いがして……これでオマンコが上等なら完璧だな！」
「あ、ダメ、やだ、ひ、開いては……ダメぇッ！」
必死になって腰を揺らしたのに、股間に貼りついた男の手は少しも離れず、肉畝に触れた武骨な指がV字に開いて――く、ぱぁ。
幼気な姫の蕾のような秘裂が、大きく左右に開かれた。現れた紅い菱形はもちろん小さく、うっすらと滲んだ蜜に潤んで桃色に輝き――パンジーの花びらのように可憐な粘膜花弁が、牡たちの熱い視線を受けてヒクン、ヒクンと恥ずかしそうに震え蠢く。
「ハハッ！　こりゃまた可愛らしい」
「けど、匂いは少々小便臭いな。お姫様といってもガキはガキか」
「しかしそれだけじゃねぇぞ。見ろ、ちゃんといやらしい蜜が滲んできた」
「見た目は幼くても中身は大人か。ならば問題は穴の具合だが、さて……」
一番大柄な男が卑しい笑みを深め、怯える姫にのしかかった。淫棒に己の手を添え、紅くむくれた亀頭を幼気な秘裂に寄せて――。
「い、いや、イヤイヤ……あッ⁉　い、痛……く、くぅぅ……う、ンぎぃぃぃ……ッ！」
熱く硬い淫棒が、姫の処女膣穴を抉り始めた。
ほとんど濡れていない小さな小さな壺口が、猛々しく怒張した牡肉に力任せにこじ開けられ、限界以上に伸ばされる。自分の指すら知らない繊細な粘膜が硬い男根に押し広げら

れ、木の根のように弛く捻れた淫茎にギチ、ギチ、と磨り潰されていく。
（痛い、痛い痛い……痛いぃぃっ！）
秘裂から脳天まで、身体を真っ二つにされていくような激痛。あまりの辛さに声すら出せず、姫は男の胸の下で細い身体を強張らせ、奥歯を喰い縛りながら涙をこぼした。
「ずいぶんきついが……熱くてよく締まる、いいオマンコだ。おや？」
「どうした？」
「へへへ……薄つきのヒダヒダが、チンポに吸いついてきやがった！」
下品に笑う男の声が、深々とねじ込まれた淫棒を伝って姫の腹腔に反響した。ペニスの尖端に膣奥を圧されているのか、へその裏側に不快な痺れがじわ、じわ、と湧き起こる。
「可愛い顔して結構好き者なんだな、この姫さんは」
「ほかの穴も使えたりしてな」
男たちが下品な言葉を交わし――。
「う、くぅぅぅ……あっ!?　な、なにを……ひぃっ!?　ひぃぃ……ッ！」
太い腕を背に回され、激痛に強張る身体をグイッと引き起こされるイミス姫。
巨根に抉られた膣穴に新たな痛みが刻み込まれ、意識が吹き飛びそうになった。息をするだけでも処女粘膜が淫棒にしごかれ、男の腰を跨いだ細い身体が激痛に軋む。
「い、痛い……抜いて、お願い抜いてぇっ！　毀れちゃう、毀れちゃうぅうっ！」
「お姫様だけあって、わがままだな。まだ始まったばかりなのに」

「そら、ケツを上げな。こっちの可愛い肉穴にも、俺たちのチンポをぶち込んでやるよ」
「え……あッ⁉　け、ケツって、まさか……やだ、嘘……そ、そこは、ダメぇえッ！　ぶ、ぶぶ、無礼にもほどが……あ、あ、あギひぃいっ⁉」
尻の真ン中に熱い弾力が押し当てられ、そのまま一気に刺し貫かれた。男の腰を跨いで喘いでいたイミス姫の細い身体が雷に打たれたように反り返り、ヒクンヒクンと痙攣する。
（は、は……入って、いる……私のお腹の中に、太いのが、硬いのが……こ、こんなに深く……こんなに奥まで、は、入って……入って……るぅ！）
可憐な尻穴を限界以上に押し広げ、胎内に図々しく居座る、どっしりとした存在感。太く、硬く、熱く、長い。真っ赤に灼けた鉄の棒を、腹の奥深くまでねじ込まれたようだ。
だがしかし、なぜか苦痛以外の感覚もあった。焼きつくような、蕩けるような――心地よい痺れ。膣と尻穴を隔てる繊細な粘膜隔壁が、二本の剛直に挟み込まれ、力強く揉み潰されているのだ。
「おお、締まる締まる。こっちの穴もなかなかのもんだな、姫さん」
「ンぁっ⁉　あ、や……う、動かないで、ダメ……裂ける、お尻、裂けちゃ、うぅッ！」
仰向けに寝た男の腰に跨がり、その厚い胸にしがみつくような格好になった幼気な姫が、深々とねじ込まれた淫棒に可憐な尻穴を抉りまくられ、掠れた涙声をこぼす。
激痛とともに熱い痺れも湧き起こり、それがジワジワと背や腰、太腿へと広がって――自分の身体が自分の物でなくなっていく。

（私はもう、本当に騎士ではない……姫にとっても、民にとっても、国にとっても……騎士としての私は、必要とされていない……でも、豚としてなら……）

みなが見てくれる、笑ってくれる。

もっともっと必死にやれば、きっと狂おしく疼く尻穴や膣穴に太くて硬くて長いモノをねじ込んでくれるだろう。甘辛くて熱いペニスを、ゴツゴツとしてたくましい逸物を、何本も何十本もしゃぶらせてくれるだろう――。

「ぶひ、ぶひぶひ……ぶひひ、ぶひ……」

妖艶な媚笑を浮かべたアリシアは、膨れ上がる欲望に衝き動かされるまま懸命に、浅ましい豚真似を続けた。

だが、復讐心に燃える男たちはそれだけでは許さない。プライドの折れた女騎士がどこまで堕ちていくのかという、淫らな好奇心もある。

「この豚、なんだか元気ないな。鳴いているだけでちっとも這わない」

「ぶ……ぶひ……？」

「病気なのかもしれないな。ジュクジュクオマンコは惜しいが、犯さないでおくか」

「ぶ、ぶひ……ぶひ、ぶひぃいっ！」

さらなるおあずけを示唆されたアリシアは、半狂乱になった。もうすぐ挿入れてもらえる、あと少しで気持ちよくなれる――淫らな期待が膨らんでいただけに、哀しさが暴走してわけが分からなくなる。

（は……這えばいいの？　這えばいいのね⁉）
胸中に問いながら地面についた手足を懸命に繰って、ノタノタと這う。疼く尻を高々と突き上げ、大きく左右に振って、淫らに潤んだ秘裂を周囲の男たちに見せつけながら――。
「ぶひ、ぶひ、ぶひひぃ……ッ！」
乳房を揺らし顔を上げ、必死に媚び笑う女騎士。
「お？　どうした、急に元気になったな」
「もっとケツ上げろ！　乳も揺らせ！」
「ぶ、ぶひぃいっ！」
声をかけられたアリシアはそれだけでもう、嬉しさのあまり昇天してしまいそうだった。
（わ、私は、豚……騎士ではなく、豚……）
そう思っても、もはや恥辱は覚えない。
男たちに悦んでもらえるなら、豚でいい。笑われ、嘲られ、蔑まれても、それは気持ちよくしてもらえる兆しなのだから喜ばしい――。
早くも絶頂を予感した女体が、内側から燃えてねっとりとした汗を噴く。胸の下で弾む巨乳がしっとりと輝き、突き上げて打ち振る美尻が艶めかしい桜色に火照り――トロトロと太腿に垂れる、水飴のような愛液。
男たちの足元を這い回る女騎士は、辱められる悦びに目覚めてしまった。頬や背に降り注ぐ意地の悪い視線に、胸がどうしようもなく高鳴ってしまう。仰向けた顔は倒錯の喜悦

に蕩け、潤んだ瞳にはもはやなにも映っていない。
「涙や涎で、顔がぐちょぐちょだな。そんなにオマンコして欲しいのか？」
「ほ、欲しい……ぶひぃいっ！」
男の声に泣き笑いの顔で答えたアリシアは、いつの間にか高舞台の突端の真下にいた。舞台上で自慰し続けている幼姫といやらしく媚び笑いながら浅ましい豚真似をする女騎士が、はからずも上下に一直線に並ぶ。
「み、みんな……酷いッ！　私がこんなに疼いているのに、こんなにジュクジュクしているのにぃ……アリシア様ばっかり弄って、私のことなんかすっかり忘れて……」
馬番に裏切られ、一ヵ月もの間休みなく犯しまくられ、アリシア以上に堕落してしまった幼姫は、眼下の男たちに向けてあどけない秘裂を掻き開き、小振りな美尻を上下左右に激しく振りまくっていた。
女騎士が弄られ、苛められている間、ずっとおあずけを喰らっていたわけだから、その欲望はとっくの昔に臨界点を越えていた。
あどけない頬は涙に濡れ、わななく唇からは甘やかな吐息がとめどなくこぼれ——絹のドレスを自らの手で引きむしり、桃色の勃起乳首をクニクニ、クニクニ。
「私、私……姫なのにぃ……どうしてだれも言うことを聞いてくれないの？　どうしてみんな、意地悪するのぉ……！」
「そうではありません、姫……いえ、女王様。この奸賊を成敗したのちには必ず、女王様

の下へ参ります。いましばらくの御辛抱を」
戦塵に塗れて凶相を増した男たちが、鼻の下を伸ばしながら姫を諭した。美しく引き締まった女騎士を犯したあとには、水仙のように細くなよやかな幼姫を抱ける――そう思えば、股間に膨らんだ淫棒がますます硬く、熱くなる。
だれひとりとして状況の異常さに気づかないのは、傍で北叟笑(ほくそえ)んでいる黒髪の魔女が淫欲を高める魔法を密かに使っているから。
（うふふ……騎士様もすっかり素直になったし、姫様は完全におかしくなっているし……いい頃合いね。そろそろ仕上げに入ろうかしら）
さり気なく腕を動かし、魔法の組成を組み換えるラーマ。
辺りに漂う淫気がいっそう濃くなり、
「女王様を拐かした逆賊は許しがたいが……しかし、これ以上女王様をお待たせするのも忍びないな」
「俺たちの肉槍で、そろそろトドメを刺すか」
言い訳がましく言った男たちが、牝豚に堕ちたアリシアの身体へ競うように手を伸ばす。
「あ……ぁあっ⁉」
猛る男たちに揉みくちゃにされて、悦びの声を上げる女騎士。
まだ挿入れられたわけでもないのに膣奥が燃え、腕や脚から力が抜ける。愛撫と呼ぶには荒々しすぎる手つきに身を委ね、温かく柔らかな生き人形として姿勢を変えられ――。

片方の膝を掬われ、男の肩に担ぎ上げられた。伸びやかな太腿が上下に大きく開き、ズレた下着からはみ出した秘裂が横を向いて、愛蜜に濡れ光る粘膜花弁をあられもなく晒す。
「うわ、こりゃすげぇ！　ベチョベチョじゃないか！」
「ぶ、ぶひぃ……」
覗き込んだ男たちの呆れ果てた声に、なおも豚真似をしているアリシアの頬がカァッと赤らむ。しかしそれは、羞じらったせいではない。
（み、見られて……るぅうっ！）
針のように鋭い視線、荒さを増す鼻息、柔肉に喰い込む武骨な指――太く硬くたくましい淫棒を、膣や尻穴へねじ込まれる予兆。
めくるめく絶頂を予感した女体が、骨まで蕩けて肉芯を濡らした。
（挿入れて、お願い……ここへ、挿入れてッ！）
逸る意識が股間へ集中、紅く火照った肉畝が男たちの視線を求めてなおも大きく開く。
ヒクン、ヒクン、と別の生き物のように蠢く淫唇の付け根で餓えた膣穴が喘ぎ――待ちきれなくなった膣洞がフライング気味に蠕動し、細かく泡立った愛液をコポ、コポ、とこぼし始める。
「しょうがねぇなあ、挿入れてやるか」
アリシアの片脚を肩に担いだ男が、獣のように歯を剥いて笑った。ベルトを弛め、猛る淫棒を振り出して――紅くむくれた亀頭を、蜜まみれの淫華に擦りつける。

「ふぁっ⁉　あ、あぁあっ！」
待ちに待った牡肉の感触に、喉を反らして歓喜の声を上げるアリシア。
「こら。豚真似を忘れてるぞ」
「う？　あ……ぶ、ぶひぃい……ッ！」
男に叱られ、慌てて豚の鳴き真似をするが、その間も頬は淫らに弛みっぱなしだ。
（硬い、太い……ゴツゴツ、して、るぅっ！）
木の根のように捻れた淫茎が、火照る割れ目に強く強く押しつけられ、愛液に潤んだ淫唇をくちゅ、ぬちゅ、と押し潰しながら前後に動く。赤々と輝く亀頭が勃起クリトリスを捏ね、潰し――。
「ぶひ、ぴぎ……ぶひぃい……ッ！」
閃く快感に手足をビクンビクンと震わせながら、歓喜の声を上げるアリシア。
「まだ挿入れてないのに、いまにもイきそうだな」
「本当にもう、騎士ではなくて牝豚なんだな」
「そ、そう……ぶひぃい……わたし、めすぶた……ぶひぃッ！　お、オマンコらいしゅきな、めすぶた……ぶひぃい……っ！」
恥も外聞もなく、ただただ肉の悦びを欲してアリシアは媚び笑う。片脚を担ぎ上げられて斜めに傾いだ腰をゆるゆるとくねらせ、割れ目に添えられている男根に自ら淫唇を擦りつけて――と。

「豚にオマンコは贅沢だ」
「ふぁ……あっ⁉　そ、そこはぁ……ッ！」
牝蜜をたっぷり搦め捕った紅い亀頭が、女騎士の尻穴にヌチュッと擦りつけられた。
男としては、凛々しい女騎士をさらに辱めるつもりだったのだろうが――。
「し、し……しり、まんこぉおっ！」
すでに開発済みのアリシアは、照れ臭そうに微笑んで自ら括約筋を弛めた。
「うぉっ⁉　な、なんだこれ……し、尻の穴なのに、チンポが……吸いこまれるッ⁉」
勃起ペニスに粘ついた生温かな愛液が潤滑油となり、アリシアの排泄孔へヌヌ、ヌヌ、と苦もなく潜り込んでいく。色を失うほど伸びきった肛門に呑み込まれた亀頭は、妖しく蠕動する直腸粘膜にねっとりと絡みつかれ、しゃぶるように揉みくちゃにされて――。
「く……おぉっ⁉　あ、熱くて滑らかな、ヌルヌルした粘膜が……おお、おお……俺のチンポを、撫で回してくるっ！」
女騎士の尻穴に淫棒の付け根までしっかりとねじ込んだ男が、感極まった声で吼えた。肉の悦びに誘われるまま自然に腰が前後し始め、
「はぅ、ぁあ……ぶ、ぶひぃいっ！　しりまんこ、イィ……イィ、ぶひぃいっ！」
リズミカルに突き揺すられたアリシアも、蕩けた口調で気持ちよさそうに鳴く。
猛々しい男根に刺し貫かれた尻穴はもちろん、おあずけされた格好の膣洞にも快感があった。直腸を埋め尽くした太さによって前の穴も押し潰され、細かな襞という襞に愛液を

溜めてざわざわと蠢いていた膣襞が、互いに摺り合わされたのだ。
「ぶひ、ぶひ、ぶひぃぃ……尻マンコ、好き……しゅきしゅき……らいしゅきぃぃっ！」
意識が蕩け、舌が縺れ、淫らな声が止まらない。腰が捩れ、胸が仰向き――剥き出しの美乳が突き込みに合わせて激しく揺れた。
小指の先ほどの大きさまで膨れ上がった勃起乳首が、上へ下へ、上へ下へ――同じ軌道を何度も何度も往復して、群がる牡たちの興味を誘う。
「なんだ、尻の穴でも感じるのか」
「すっかり堕ちきってるな。これではなにをしても喜ばせるだけで、辱めにならねぇ」
「まあいいじゃないか。一応これでも、元はあの麗しのアリシア様なんだぜ」
「以前は遠くから見つめているしかなかったが、いまはこうして、乳も揉めるしな」
「あっ⁉　あ……ぅうっ！」
じっとり汗ばんだ大きな手が、火照って弾む乳房に被せられた。痛いほど痼り勃った乳首が押し潰され、乳肉に喰い込んで鋭い快感を閃かせる。武骨な指先が喰い込み、ムニッムニッと捏ね潰し――乳肌の裏側に、熾火のような熱い悦びが一斉に湧く。
「お……おっぱ、イィイ――――ッ！」
意識が吹き飛びそうな快感に、毀れた笑みを浮かべるアリシア。
力強く抉られている尻穴が胸の悦びに合わせてきゅう、きゅう、と絞れ、前後している淫棒をますます強く締め上げる。

「ほう？　そんなにオッパイが気持ちイイか」
「い、イィッ！　む、むぎゅむぎゅされると、あちゅいの、とろけちゃうの……あっ⁉あ……ち、ちち……ちく、びぃいっ！」
乳を揉む手が歪む丸みに沿って滑り、指の間に真っ赤な勃起乳首を挟んだ。硬い指先を乳房に喰い込ませつつ、指の節で肉豆を左右から締めつけ――根元から尖端へ、何度も何度もしごき上げる。
左右の巨乳に網の目のように張り巡らされた乳腺に、熱い疼きが湧き起こる。乳首を挟んで搾り上げる指の動きがポンプのように働いて、乳芯に膨れ上がったもどかしい感覚が、徐々に徐々に、胸の尖端へ迫り上がってくる。
「うぅ、ぁあ……ぶひぃいっ！」
「もう豚真似はしなくていいぞ」
「い、いぃ……いいの、ぃい……ぶひぃいっ！」
苦笑する男に向けて、淫悦に朦朧としたアリシアはしきりに豚真似を繰り返した。
「わたし、ぶたなにょ……いやらしいめすぶた、なにょぉ……らから、ぶひひ……おまんこも、しりまんこも、じぇんぶじぇんぶ、イイぶひぃいっ！」
「んん？　それはオマンコもしろと言うことか？」
「そ……そうブヒッ！　ありしあ、おまんこ、らいしゅきブヒィイッ！」
凛々しい女騎士の面影は、もはや欠片も見当たらない。法悦の涙に濡れた頬を淫らに弛

め、犯された尻穴の快感に「あぅ、あぅ」と喘ぎ――。
「て、て、てもぉぉ……手も、上手なのよ……ありしあ、手でも上手にできるのよ……」
待ちきれなくなった女騎士が自ら手を伸ばし、男たちの股間を撫でた。喜んだ男がベルトを弛め、淫棒を振り出せば、
「あ……は、ははは……おちんちん、らぁッ！」
欲望に唆されるまま細指を絡め、赤黒く照り光る肉茎をしっかり握り締める。掌や指の腹に感じる鋼のような硬さに目を細め、肌を焙る牡肉の熱さにうっとりしながら、慣れた手つきでしゅっしゅ、しゅっしゅ、としごき始める。
「お？　自分で言うだけあって、確かに上手いな」
「剣を握っていたとは思えないほど、柔らかくて温かくて、スベスベとした――ああ、実に気持ちイイ。力の入れ具合が絶妙だ！」
男たちが喜んでいることを、アリシアは耳や目ではなく、掌で知る。
（ああ……硬い、熱い……どんどん太く、なる……芯に精液が、湧いているのね……いっぱいいっぱい、出してもらえるのね……）
肌や髪にべっとりと貼りつく、温かな重み。鼻腔をくすぐる、凄烈なほどの青臭さ――舌にはざらつき、喉には粘つき、膣や直腸の奥に射精されればヘソの裏側がじんわりと温かくなる――肉悦のエキス。
淫欲がさらに高まり、口が勝手に開いた。淫らに微笑み、媚売る瞳を揺らめかせながら、

犬のように舌を伸ばして「はっはっはっ」と口で息をする。
気づいた男がニンマリ笑い、
「そうか、これをしゃぶりたいのか」
猛々しく怒張したペニスを振り出し、仰向いたアリシアの顔に逆さに乗せた。
「あ……あぇあっ！」
額に密着した裏筋の、熱さと重み。美しい鼻梁を越えて唇に触れる、紅くむくれた巨大な亀頭。
（お、お……おちんちん、らぁ……すごく、おいしそうな……おちんちん……らぁ！）
微かに漂う精臭を嗅いで、アリシアの思考は完全に蕩けてしまった。牡を欲する淫らな気持ちが膨れ上がり、必死に舌を伸ばして、顔に逆さに乗せられた淫棒をレロレロピチョピチョ舐め始める。
「ンぁ、ン……ああッ！　お、おい、しぃッ！」
男根の甘辛さにうっとりしたアリシアは、お返しとばかりに、左右の手それぞれに握り締めている淫棒をますます激しくしごいた。尻穴も絞り、腰をくねらせ、肛悦を与えてくれる男根をギュッギュ、ギュッギュ、と絞り立てる。
「おいおい、これが本当に、あのアリシア様か？」
汗の珠を浮かせた滑らかな額、熱く潤んで揺れる碧玉のような瞳――赤らむ目元は淫らに弛み、男たちと視線が合うと媚びるように微笑んで――。

歴戦の勇士の面影は、欠片も残っていなかった。
淫悦に溺れ、さらなる快感を渇望して懸命に媚笑するその姿は、美しくも卑しい牝獣だ。
「そうか、コイツが欲しいのか」
ニヤニヤした男が淫棒を振り出し、法悦の涙と涎に濡れたアリシアの頬に擦りつける。
途端――。
「ンにゃっ⁉　にゃ、にゃにゃはぁ……」
いままで以上に蕩けきり、淫靡に微笑む女騎士。
「うわ、なんていやらしい顔だ……本当に、穴でなくてもいいんだ」
「い、い……イイぶひ、ぶひぶひ……め、めすぶたの、あ、あ、ありしあは……どこもかしこも、おまんこ……ぶひぃいっ！」
いまにもイきそうな顔をしたアリシアが、縺れる舌を懸命に繰って淫らな言葉を紡ぎつつ、突きつけられた亀頭に自ら頬を擦りつけていく。
「ふ、ンふふ……さきっちょ、ぬりゅぬりゅ、気持ちイイ……硬いの、好き……熱いのも、好き……太いの、もっともっと、好きぃっ！」
「そうか、そんなに好きか。ほら、こっちにもあるぞ」
「あ……ンぁ、あぁあ――――っ！」
頬に、額に、唇に――新たな淫棒が次々と押しつけられる。
（おちんちん、おちんちん……おちんちんがこんなに、いっぱい……ッ！）

真っ赤な亀頭を擦りつけられた柔肌が、甘く痺れて蕩けていく。鋼のように硬い裏筋に薄い瞼を揉まれたり、耳の穴に先走り汁を擦り込まれたり――。
「うは、なんて顔するんだこの牝豚は！」
「まあそう言うな。可愛いじゃないか。よしよし、オッパイにも擦りつけてやろう」
揉みくちゃにされて桜色に火照った女騎士の美乳に、上下左右から迫る何本ものペニス。
「う……あ、にゃぅんっ！　お、おっぱいも、イィ、イィ……イィイッ！」
亀頭に押し歪められた乳肉が、蕩けるほどに気持ちイイ。先走り汁を垂らした鈴口が横合いから勃起乳首に擦りつけられ、クワッと開いて――。
「ふぁっ⁉　う……ンぁあッ⁉」
びっしり生えた肉歯に快楽神経の塊を甘噛みされ、炸裂する快感に弾かれながらも、舌っ足らずな口調で叫ぶ女騎士。
朦朧としながらも異変に気づいたのは、さすがと言うべきか――周囲に群がった男たちがゴムのように歪み、触れ合う肩や腕を融合させて、ひとつの巨大な塊になっていく。
「な、なに……ラーマの、魔法⁉」
傍目にはとてもおぞましい光景なのだが、当の男たちはだれひとりとして怯えていないし、疑問すら覚えていないようだ。
「気を逸らすな。ほら、咥えろ」
「ンッ⁉　ンぷ……ンぁ、あ、ああっ⁉」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!
キルタイムのアダルトコミック誌!
業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!
二次元ドリームマガジン
偶数月17日発売
魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!
コミックアンリアル
奇数月12日発売
フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!
コミックプリズム
不定期発売
KTCといえば闘うヒロインアンソロ!
メガミクライシス
強く美しいヒロインが淫らに堕ちまくるアンソロジー!
奇数月中旬発売
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム
検索
Click
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!